甲号

下木主月二十日夜一閑

三十七年甲辰

露國問題

栗香

早稲田大学図書館
文書27
B 88

三十七年　　露國四題

一月四日　大蔵行伊藤と財政談話
一月二日　朝倉滄洲を訪ふ不在なり板垣伯を訪ふ
一月八日　露廷より今日回答あり公使ローゼン病氣なり小村外相より
一月八日　公使館を訪問ローゼン第二回と同じ第一回と同
一月八日　後藤伯を訪ふ新聞社なり
一月七日　方谷山人を訪ふ伊藤侯に謝状を送る
一月八日　米國陸軍大臣撫を使ふ伊藤侯と懇談
一月八日　昨夜の新聞に中立を説いたりし

一月八日　伊藤侯軍艦降行きたるべし

一月十日　伊藤侯に收拾場保護の命を賜り役を辭し帰京の事

一月十日　高齋伊藤山縣大磯より帰京の事　直桂首相邸に

一月十日　臣元老会議第二回　会議の結果

一月十日　元老伊藤山縣井上松方内閣法案陸海軍案諮詢

一月十日　御前会議

一月十三日　露国に最後の警告を賜ふ　○高橋内閣成立

一月十四日　東京日々新聞　四章を掲載利益を屬す

一月十五日　山本栄吉氏新造の軍艦鳥號の副長を命ぜられ今日赴任

一月十五日　大磯行

一月廿日　桂山内在大磯より帰京の事

一月廿日　聚楽第一回の晩餐　晩餐後境界線を

一月廿日　伊藤侯に此日の安藤を撤回の改我国千七百年に敵し

一月廿日　更に海軍省に対し不穏の行為撤回を申入

一月廿日　支那に対し最後打電　清心丸は時の内閣の

一月廿日　議論を抗争し伊藤侯は不許　山縣の説に

一月廿日　桂内閣　土方内務大臣辞表提出

一月廿日　義樟山伯爵ニヤハン一疋拂ヲ以テ晩方ヨリ樟山閣兵ヲ引

〃月〃日　食の後摩ヲ拂ヲ大ヲ掃。ヲ山中澄ヲ英一郎ニ手有

〃月〃日　拂掃ヲ第四ヲ

一月廿日　伊藤ヲ来ル　ヲ山野見

一月廿日　ヲ樟山ヲ訪ヲ次ヲ伊藤山縣ヲ面識ヲ財政ヲ

〃月〃日　拂方井上ヲ　拂而ヲ〃ヲ当振のみヲ不信用ヲ不結合ヲ

〃月〃日　露ヲ朝ヲ来ル海軍ヲ樟ヲ　ヲ

〃月〃日　命ヲ歌ヲ主動ヲ命ヲ拂位ヲ設ヲ切ヲ実ヲ拂居ヲ

一月廿日　ヲ前樟山ヲ軍大将ヲ義山ヲ兎獵ヲ知ヲ　晴

〃月〃日　数孫ヲ小鳥一羽ヲ孫真ヲ来ヲ　一仕士獵大

〃月〃日　ヲ軍ヲ隨行樟山ヲ獵場ヲ着ヲ

一月廿日　ヲ樟山ヲ訪雑汁ヲ飛ヲ

〃月〃日　今日露国ヲ前会議ヲ

〃月〃日　一昨廿二ヲ露国ヲ去ル十三日海兵ヲ中佐四名

〃月〃日　ヲ事ヲ備告ヲ右ヲ月廿八ヲ家第屋議

〃月〃日　ヲ開ク

一月廿日　露延ヲ来ヲ回答ナシ

一月廿日　嶽大磯ヲ発ス

二月一日　伊藤大磯ヲ発ス

〃　二日　高輪山内来伊勢ヲ訪来ル　横浜ヲ経テ来ル　文徳義

〃　三日　来ル　川村鉄太郎　沼津ヲ経テ来ル

〃　四日　初瀬来訪シ　夜ニ入リ来ル　内閣ニ出頭　一泊居ル

〃　五日　出ル不都合ニ堪ヘシ

〃　六日　高須伊勢ヲ伴ヒ　横山ヲ招キ来ル　夜伊勢ヲ

〃　七日　日暮須田先ヲ訪ヒ　対談　相ヒ酒ヲ飲ム

〃　八日　河野主計来ル　十日戦争ニ敗北ヲ誤ル

〃　九日　甲午ニ吉例日晨祭ヲ行ヒ　飽迄大捷ヲ祝シ　一大白

〃　十日　挙ノ宴ヲ開ク

一月十三日　伊藤　能登仕舞演事ヲ上京　山縣宅ニ泊

〃　十四日　上京　横山日記

〃　十五日　高輪　桂首相　宮内ヲ　山縣　伊藤　大山　松

〃　十六日　方井上元老　山本寺内　小村　三大臣　会議

〃　十七日　夜　桂首相　山村外相　打揃テ　参内　前奏

〃　十八日　上奏　問　招魂元老　宮内ヲ　会議ヲ　復命

〃　十九日　山縣元帥ニ　之ヲ　先ヲ　退出　井上大蔵長官方ヘ

一月三日　諸参与書記退出せる伊藤・山本・小村等内々
〃　八日　を以て首相官邸に会合し一旦出営の後再び諸参与
〃　八日　原海軍卿・陸相・大蔵・海軍・農商務・海軍大臣・一木法制局長官等
〃　八日　書記官長出席諸書類を提出し審議を遂ぐ
〃　八日　廿七
〃　八日　於て各官衙の軍備財政共に完し
〃　八日　東郷海軍大臣直に帰朝し大観を陳せん
一月四日　御前会議　伊藤枢相の宮前九時四十五分に御
日　参内拝謁を上御事下問に奉答せる上諸事

一月　一度心閣を辞し首相官邸に赴く
〃　日　午後六時御前会議を開き乃ち伊藤山縣
〃　日　方井上の四元老桂山本曾根小村等内
〃　日　各大臣大山伊東軍令部長東郷海軍内閣
〃　日　諸般の評議を凝す　六時過き一同に五列十重天を業
〃　日　仰凡の決定せり

露国東洋艦隊

〃　日　装甲戦列艦　八艘　九八〇〇〇噸数
〃　日　装甲巡洋艦　六艘　五五六五〇

月日			
〃	巡洋艦	十五艘	七、二〇〇
〃	砲艦	七艘	八、八五〇
〃	水雷艇	四十四艘	一〇、八〇八
〃		合計八十艘	二十四萬五千四百〇八噸
〃	装甲戦闘艦		
〃	レトラヴザン	旅順ニ於テ沈没	水線下部常用ポンプ破壊ス 壹萬二千九百〇二噸
〃	ツエザレウイッチ	〃 破壊	艦部ノ破傷 壹萬二千九百十二噸
〃	ヘレスウエト		壹萬二千六百七十四噸
〃	ボベーダ		壹萬二千六百七十五噸
〃	ペトロパウロースク		壹萬九百六十噸

月日			
〃	二月廿五日十隻遊撃隊 水雷ニ罹ル		
〃	ボルタウア	旅順ニ於テ 擱坐	壹萬九百六噸
〃	セバストポール		壹萬九百六噸
〃	一等巡洋艦		
〃	バルタタ	旅順ニ於テ	六千七百三十五噸 中央海峡ノ近傍ニ沈没ス
〃	〃		
〃	デアナ	旅順ニ於テ	六千七百三十一噸
〃	二月九日正午二時 開戦ヨリ六分 戦闘力ヲ失フ		
〃	ワリヤグ	仁川ニ於テ 擱坐	六千二百噸
〃	二月廿五日正午 旅順ニ於テ 我水雷ニ罹ル		
〃	アスコリド		五千九百五噸
〃	二等巡洋艦		
〃	ノーウイー		三千八噸
〃	バヤーリン		三千二百噸
〃	サビヤカ		千二百噸

旅順拔錨露艦

二月三日　昨二日午前旅順口ヲ拔錨シタル露国軍艦八隻甲戰艦七艘

六月五日　巡洋艦六艘水雷敷設艦二隻ナリシ

六月八日　咸鏡道城津ノ居留民

二月五日　北韓在住日本人引揚

六月八日　元山迄引上ケノ義州安東縣ノ日本人ノ平壤ヲ引揚クベキ

六月九日　旨義州城津領事ヨリ西知ラシ京城城津間ノ電線不通

六月一日　清國皇帝ヘ中立ヲ関シ各省總督巡撫ヘ訓示アリ

六月二日　露国白谷公使露国政府ノ回答ハ極東太守アレクセーフ中將ヨリ発

六月　附セラレタル中將ヨリ回答ノ趣意ヲ見認セシメ之ヲ東京送附

六月　シ而シテ東京ニハ月曜日「八日」ヲ以テ到達セ

六月　回答趣旨六日倫敦聖役得堡ノ風説ト據レハ露国ハ日本ノ

六月　滿洲ニ関スル要求ノ詳議ヲ先ツ露帝ノ御裁ヲ終ヘ露

六月　国政府ノ不承諾説ヲ抑制スル能ハザリシトカフ

六月　五日午後二時十五分動員令ヲ參謀總長大山軍令部長

六月　伊藤軍ヨリ勅裁ヲ仰キ許可アリ

六月　一日旅順口ヲ出デシ露国軍艦十四艘ハ又又出

六月　旅順ヘ引返シ引返タリ厳重ニ戒嚴四艘ヲ以テ守

六月　リ居ルヨシ

二月六日 小村外相ハ午前十時頃書記官ノ露國公使館ニ遣ハシ露公使ローゼン男ハ午後二時馬車ヲ駆テ外相ノ官邸ニ訪問シ最後ノ對面ヲリ小村外相ヨリ兩國交渉ノ斷絶ヲ通告セリ

〃月〃日 同日英米兩國公使ヘ談話セリ翌七日佛國公使其他

〃月〃日 八獨乙公使今八日朝伊澳兩國公使猶午後ハ公使筆頭

〃月〃日 タル自身義他ノ各國公使一同ノ接見ニ同樣事ヲ通告セル

〃月〃日 伊藤大磯ニ帝ル 露公使内外ノ親ヲ招キ別宴ノ間キ

二月七日 栗野駐露公使石還セン

露

二月七日 昨六日夜我戰闘艦及巡洋艦他水雷艇及砲艦大小六十艘ノ艨艦敵地何方面ヘ駆行セリ

〃月〃日 聯合艦隊長東郷司令官所率ノ戰闘艦六艘

〃月〃日 敷島 朝日 三笠

〃月〃日 初瀬 富士 八島

〃月〃日 上村司令官所率ノ巡洋艦 六艘

〃月〃日 浅間 常磐 東

〃月〃日 出雲 磐手 八雲

〃月〃日 出羽ノ將第一艦隊司令官所率 六艘

月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日

月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日

高砂
千歳

笠置
吉野

明治廿七年二月

日露同盟破裂

動員令ヲ發ス

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月

二月十日午前二時着電

東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊ハ去ル九日佐世保ヲ出港シ引続キ豫定ノ如ク行動シ八日正午我駆逐隊ハ旅順ノ敵ヲ攻撃セリ当時敵艦隊ハ大部隊ヲ旅順港外ニ在リテ我駆逐隊ハ水雷ヲ掛シ来ルヲ待ツ

ホルタロフ一隻巡洋艦アスコールド外二隻アリシモノト認ム我艦隊九日午前十時旅順港沖ヲ発シ正午ヲ約四十分間港外ノ敵ヲ攻撃セリ此攻撃ヲ結果ハ未タ明瞭ナラサルモ敵ヲ撃

クラモ損害ヲ與ヘ大ニ彼ノ士氣沮喪セシメタルモ
ノト信ス敵ハ漸次港内ニ退去セシメ午後
一時戦闘ヲ止メ引揚ケタリシ攻撃ニ於テ我ノ艦隊
ハ損害ハ軽少ニシテ毫モ戦闘力ヲ減セス
死傷約五十人名ニ内我死四名負傷五十四名
仁川方面ニ向ヒ分遣艦隊ノ我況ハ既ニ砲
司令官ヨリ直接電報ヲ以テ我駆逐隊ハ敵砲火ヲ冒
シテ攻撃ヲ加ヘ其大分ハ既ニ本隊ニ合セリ艦
隊ノ第一艦ノ各殿下ノ皆傷ヲ受ケ我將卒
一般ニ戦闘ノ行動ハ状況ハ沈着ニシテ皆平常

東京博文堂製

ニシテ異ナラス戦闘ニ於テ士氣益々盛ナ
リシ而シテ昨夜来風波アリ七艦
船間ニ安固ニ碇泊シタルモ各艦ヨリ詳報ニ接
セス不文敢テ概況ノミ報告
二月十日　東郷聯合艦隊司令長官

前日清戦争ニ在リシ此船

ロシヤ号
カウリツク
クロンボイ

三十七年六月

十四日

十時佐渡丸、午前七時頃六連島ヲ過キ先行ノ常陸丸ニ續キ速力ヲ早メ沖ノ島ヲ南ニ距ル八浬ニ至レル時、輸送指揮官星野少佐ノ傳令講話アルヲ為メ一同甲板上ニ集マラントスル時三度ノ露艦現出ス其距離八千米突ホドナリシガ露艦ロシヤ号ヲ先頭トシテ艦隊ハ二列ニ分レ左右ヨリ我ニ向テ進来リ止レノ信号ヲ掲ク此時常陸丸ハ佐渡丸ノ右二浬ニ在リシカ

東京原製

師團

第一 東京 陸軍中將 貞愛親王 轉地

第二 仙臺 陸軍中將 西寛二郎 轉地

第三 名古屋 陸軍中將 大島義昌

第四 大阪 陸軍中將 小川又次 歸養大阪

第五 廣島 陸軍中將 山口素臣 死

第六 熊本 陸軍中將 大久保春野

第七 札幌 陸軍中將 大迫尚敏

諸將

陸軍特爵 長谷川好道 轉地

第一 弘前
第二 金澤
第三 第十姫路
第四 九龍
第五 小倉

尚文 陸軍中將 死

陸軍中將 大島久直

陸軍中將 川村景明

陸軍中將 井上光

敵艦ヘ出船

東京博文堂製

四十八号 沈没

大砲 宮古 沈没 七月十四日 三千四百中二名即死 二名軽傷 他ハ無事

吉野 沈没 七月十日 春日ト衝突

初瀬 沈没 〃 〃

平遠 沈没 九月十八日 旅順ニテ水雷ニ触レ

八月十日 旅順ヲ敵艦沈没ス 大戦闘

八月十四日 我第二艦隊 蔚山沖ニテ 浦塩艦隊ヲ

攻撃リウリウクヲ撃破ス 一号ニ十ヲ 巡洋艦 砲 ロシヤ二十

リロンホイ号ヲ大破ス 旅順艦隊ヲ出テ日ノ丸ヲ撃破

露国軍ヲ総司令官 七月二十八日 発

十月二十六日 露国大本営発電

露皇帝ハアレキシーフ極東陸軍総指揮官ノ辞

職ヲ嘉納セラル

二十三日 勅書ヲ以テアレキシーフヲ総督ヲ命シ

クロパトキンヲ極東陸軍総指揮官ニ任命セリ

明治三十七年時局紀事

九月一日 台湾遼陽

十月七日より遼陽各師団、露兵奉天より大軍を
以て遼陽を進撃す

十月九日 敵兵大挙して沙河太子河
北に来る

同十一日 露軍奉天より逆襲遼陽に来
たる 大激戦列べし

十四 奉天附近大優利

十五 沙河の大敗走、露帝親征前后

露国動員令

日本橋より淺草マデ

貴族諸氏全国ノ重力ヲ挙ケ全国ノ意ヲ表シ
露国全国民ハ苦難ヲ忍ブ情
十二月日露遂ニ開戦ス希代ノ快戰多シ
戰ハ陸海軍共大捷獲ヲ宣ス
意ヲ表シ露国民大ニ振興ス
十日ヨリ接戰十二月十三日ヨリ十四日ニ
捷ハ六分遂ニ敗退
沙河会戰西部軍第一軍二萬六千
騎兵二萬六千歩兵戦闘人
砲数九百五十門

西比利第一軍団長スタルケルク中將指揮
戰死 七萬二千人
負傷 五萬五千八百六十八人
総計六萬八千人
沙河露国死傷七萬以上非常ノ大損害
十戰闘ニ三分一ニ死傷
三人ハ敵ノ死傷一人

十月二十八日 旅順方面攻撃
東鄂庭山二龍山猛烈ヲ大突
撃ヲシ砲撃ヲ開始夜九時抜刀決死
中村西森旅団少将要塞ニ侵入
十月三十日
今朝暁ヲ以テ戦ヲ始ム
二百三高地ヲ占領ス
十月三日
旅順港内ニ戦艦ヲ半沈ス生ク
撃ヲ以テ激戦九日獲ル所ノ艦船全滅

東京帝国大学
東洋文化研究所

十月七日 危険ヲ顧ミズ通ク電燈ヲ花
輝ク全滅ノ状
二十六日 露国艦隊ハ戦闘艦セバストポール
撃沈ス
二十七日 旅順港外ニ戦闘艦セバストポール撃沈ス
二十八日
北志島ノ将軍満州方面ニ寒鳥集ヲ
多ク義国ノ軍出ル方面ヲ不用ノ
二十八日
午前三時二龍山砲撃ヲ開
二十日

東郷海軍大將凱旋入京

十二月二十七日
松樹山占領

東京帝國大學圖書館藏

可二成歸國ニ付鉛筆ヲ拔来

三十八年一月廿日旅順陷落

乙号
丁未十二月廿日一閲

明治廿年

時局掛記

養浩堂藏書

養浩堂藏書

養浩堂藏書

三十七年
三十首

遼陽
癸酉
壽夫

昭紀祖孫

○三十七年

十月九日 韓兵大挙 平壌大敗走

十二月九日

○三十八年

一月九日

二月九日

三月九日 奉天附近大敗走

三月末 奉天占領

大孤月島ヲ、
奪ル

月	日	
		三十八年紀事略
一月	一日	此夜十二時旅順守將スデッセル降伏城ヲ開ク
二月	二日	黒竜大使旅順ニ於テ敵總督ト
三月	三日	
四月	四日	
五月	五日	北師營前十時ノ木將軍スデッセル會見 奉天長ハ三大
六月	六日	
七月	七日	貴族院議員等 獨逸ノ工場見
八月	八日	

一月九日
〃十日
〃十一日
〃十二日
〃十三日
〃十四日
〃十五日
〃十六日
〃十七日

スチウエ号ハ横浜ヨリ出帆シテ日本長崎ニ向フ

スチウエル号ハ長崎福州ニ着ス

スチウエル号長崎出帆上海ニ向フ

月日
月日
月日
月日
月日
月日
月日
月日
月日
月日

三十八年 時ニ向ヒ事

雇員横山源太郎ヲ二月三十日横浜ニ発シ二艘山ニ欧ヲ打

横山源太郎ヲ横浜ニ発シ二月廿二日ニ香港ニ

降服ヲ申出ル

スチウエル

一

一一

陸軍司令官

海軍中將司令官

海軍少將司令官

ケルレル

スクルイトロフ

浦塩ヘ入ル

四月十四日

機密第百號 八月一日

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月

中村少將上京　十二月十七日　廣島

東京ニテ施術セル為ニ出發ス

永田大尉

セバストポル　戦闘ノ際生死不明

十二月

明治廿八年一月一日　孫順偽裝敵將

文テ降伏

○盤龍山

○鉢巻山

○二龍山

○松樹山

第一回総攻撃ト占領ト

盤龍山ニハ午前十三時ト相ヲ砲ヲ十三時ヲ

鉢巻山ハ第四ノ二回攻撃ヲ加ヘ午前十時ヲ

二龍山ハ十二月廿八日午後四時ヲ部ノ通路ヲ

三時ヲ全ク占領セリ

占領後重砲線ヲ

敵ヲ押ヲ高

東鶏冠山

椅子山

案子山

右二山ヨリ孤當トニテ諸砲台

旅順口月下状態

一三萬五千

内

一二萬五千 傷病人

一三萬 傷病人

青泥窪一月二日 祝捷屠

支那人無数 三百人餘

支那人 桃花行列之喜 矣

嘆

一月

一月四日 我艦隊大将八敵将スチツセル水師提督ト会見

一月十日 横浜ヲ発シ十日長崎ニ停車場ニ到着シ直チニ某船ニ乗リ込ム

一月十四日 西暦二月一日ナリ 長崎ノ着前花才貢ヲ海上ニ於テ

将軍 スチツセル
参謀長官 少将 レイス
軍艦総監 リヤビーニン
参謀士官 十名

家従 教師一名
下僕二名
僕一名
従卒十四名

稲佐 阿蘭陀人 孤児四人
スチツセル
ヒ人 孤児四人
一月十四日午後二時到着

一月	安藤都督播州ヨリ来ル方ニ沿磯工日営業
八月	長州ヨリ天朝ニ献物
九月	安藤帰京
十月	於江戸
十一月	於江戸
十二月	於江戸
月 日	
月 日	
月 日	
月 日	
月 日	
月 日	

一月 名バトキ、汕頭面黒溝寺ニテ大軍出張攻撃ヲ取ル

大義ヲ唱ヒ戦闘ヲ

月 日

月 日

月 日

月 日

月 日

月 日

月 日

月 日

吟く和歌ヲ、第八師団ニ軍ヲ四十人陣背ヲ、

ヒ島ヲ出発ヲ花輪ヲ出ル兄北ヲ

四月

猿嗅

二月 三十八年

月 日 東郷大将ヲ清

月 日 我ヲ方ヲ敵ヲ高ヲ

月 日 世界ヲ出ヲ張ヲ大ヲ少ヲ

月 日 所ヲ以ヲ戦ヲ以ヲ

月 日 我ヲ祝ヲ減ヲ軽海ヲ極ヲ

月 日 思ヒテ

月 日 彼ヲ仮ヲ西ヲ

月 日 ヤ

月日 亦東郷高し今回日家に帰るに際し和ら
月日 我政府に意見硬軟の長短を測り
月日 し一歩を誤ら深山の失隆をくし極の
月日 定見を立て変異所要分へしとなすみ
月日 樺山大将と意見を異にし元老間を
月日 博奏を求めたり東郷同じく我が国論を
月日 鑑み両国相持の長短を敷へ考
月日 意見を有り其日を日露の陰謀の見へぬ
月日 ふ石能はへ何たりと謂ひ

明治卅八年二月廿五日

海軍大将東郷平八郎君来談

予東郷君に諸ルに左の事ヲハナス

甲辰 弘化元年予七歳より此年和蘭使節来り
時勢前日に異り海外諸國皆東洋に向ひ英佛
其初ヲ為スに米利堅亦来浦賀

甲寅 嘉永元年合衆國使節ペルリ来り續テ露西
亞使船プーチャチン長崎に来り今年下田に来り擊
經験ヲ諸ル

甲子 攘夷 関東京師薩長禁闕に迫り砲発

征長ノ詔勅出ツ

甲戌去年朝鮮問題ヨリ引テ臺灣出兵ニ及ヒ

清國政府ハ大久保大使出發

甲申朝鮮政府雄藩遂ニ清兵ヲ戴袁世凱我

公使館竹添ノ所率ノ軍隊ト交鋒ヘタリ

甲午日清交兵

甲辰日露交兵

以上四ツ此七甲ノ問題如此七歳ヨリ六十大

歳マテ親シク見聞歷ヒセリ

東郷曰ク予始テ之ヲ聞此以後甲子ノ

年ニ當リ國家ノ問題如何ナランヤシ

東京原製

二月九日 大活動前　野津軍前ヘ敵ノ若干部隊西方ヘ動揺セリ

二月廿日 我最右翼軍運動ノ開始ヲ　我最左翼軍大ニ發展巨砲威勢

月日 不可當　我最右翼軍ヘ鳥屏冊ノ前面ヘ發展シ敵軍包圍ノ形勢

月日 全ク成レリ

二月三日 前進占領　二十二日清河城南ノ高地ヲ占領

二月四日 清河城ノ攻撃ヲ開始シ頑強抵敵駆逐シタル末占領

二月七日 敵ノ損害ハ二千名遺棄死体　我損害ハ千名

二月廿日 敵ノ追撃　西川岭大嶺ノ線ヲ占領セリ

二月廿日　左翼ノ戰ハ敵ニ駐屯セル楊大人山王富欽ノ線ヲ攻撃シ非常ノ切異ヲ獲

〃月廿日　夜来風雪漸ク晴レ寒氣甚シク髭髯皆凍ル昔ノ戰敵ノ數月間

〃月〃日　極力築設シタル十重二十重ノ陣地ヘ彼我砲弾激烈ノ地ニ手後ニ於ケル我砲弾漸減

〃月〃日　不正頭山塔山邊牛桑堡後松木子ノ邊第一軍大苦戰ノ見ル

月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月

三月十日〇〇師團ノ主隊路附近ニ奉天鐵嶺間ニ出ヤ
敵ハ盛ンニ退却之ヲ攻撃遂ニ包圍俘虜五千大砲
數門ヲ鹵獲ス最左翼軍ハ北クル敵ヲ追撃シテ九里溝
ヨリ前進中央軍十日ハ渾河附近ヨリ退却ノ敵側面ニ猛烈
ナル攻撃ヲ加ヘ夜半其退路ヲ絶チシニ敵ハ囲ヲ脱シントシテ夜間
幾度カ逆襲スルモ悉ク之ヲ撃退シ全滅ヲ謀リシ敵ハ到底圍
ヲ突破シ得サルヲ覺悟シ翌十二日朝遂ニ投降セリ其二萬五千
大砲十二門其他弾薬糧食ノ鹵獲又十二日最左翼最右翼
両軍ハ敵撃退シツヽ中央軍ヨリ一部隊ヲ出シテ左右両軍
ト聯絡セシム追撃ヲ續行セリ右ノ如ク〇〇九日ノ如ク我軍ノ

包囲猛迫ニヨリ流石頑強ノ敵兵モ奉天ヲ棄テ遠ク鉄嶺以
北ニ退却シ此数日間殺ル敵ノ退却ハ大混乱極メクロパトキン将
軍ハ去ル八日ヨリ奉天ヲ退却セリ現ニ十二日ニテ取リ纏ヘ
ル戦利品金軍ニ於テ大砲五十四門捕虜四萬以上戦場
ニ遺棄セル敵ノ死體我軍ノ手ニテ收容セシモノ三萬五千
以上従来ノ経験ヨリ打算シ来レバ敵ノ損害十五萬以上ナルベシ
十月十日此日我満洲軍総司令官大山大将奉天ニ入城午後
二時ノ報ズルヤ一行ハ威風堂々城内ニ入リ騎兵ノ先駆ニ次ク
大山元帥ノ前後ハ儀仗兵幕僚諸式官清国式官及
歩兵ト二ツノ順序ニテ入城セリ我兵ハ捧刀捧銃礼ヲ施

東京博文館製

シ大山元帥ハ挙手ノ答礼ヲ為シ盛大ナル入城式ヲ
ハ外国式官従軍記者内国通信員其他数萬ノ兵士ハ
大山総司令官ヲ迎ヘントシテ南門外整列シ特ニ増祺将軍モ
部下ヲ率ヒテ門外ニ出迎ヘタリ
此日十日此夜ヲ以テ確實ニ鐵嶺ヲ占領シタリ

東京榛原製

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月

東京博文館製

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月

三十八年

バルチック艦隊新嘉坡ニ来リ
カムラン十日間滞在

月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日
三月一日	奉天会戦	三月十六日	鉄嶺間東昌堡奉ノ占領	九月八日	バルチック艦隊新嘉坡ニ来リ	四月八日	カムラン十日間滞在	四月十日	カムラン港ノ黄ノ出ル 吉四隻ノ運送船
									西貢艦隊
									駐清公使レッサー氏後任ニ元ノ韓国公使

日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月

雷雨

四月

月日	
四月十日	午後大磯到
四月十一日	午後酒匂川を渡る 泊
四月十二日	芳行 相模
四月十三日	庭咲
四月十四日	午後出発 八幡宮に参詣 箱根に泊
四月十五日	午後出発 大八幡 箱根山中に泊
四月十六日	山下、上泉、前田、橋本、大八幡
四月十七日	前田 大八幡 山暮
四月十八日	暮上
四月十九日	昨日

月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日

四月廿三日 晴

八月廿四日 時擇山を發し 蘇州を國境 國境を越し、三時山日出、岩崎山間狙撃を見る

八月廿五日 暑を冒し擇山 擇山より服部 服部より擇山に帰る。擇山に帰る 行李を整

八月廿六日 暑 服部擇山を発し 長崎に向ふ 長崎に向ふ 夜半長崎に着

八月廿七日 雷雨 夜半 長崎に入る。鶴一郎

八月廿八日 午後 大雨 午後 打麻花如 夜

八月廿九日 時雨 前後 雷雨 雨 夜 雷雨

[illegible]皇[illegible]カルトシ 殿暗 午後 来 [illegible] 軍艦 [illegible] 夜

旨を奉じ 長崎を発し 行

獨乙兵江蘇省海州に国旗を立て 一時

領し 聲騰し 五月十六日 次 新聞 報道

第八十七日 午後三時 北京より十六日

国旗を撤し 兵 何レヘか立去リ 云 北京

稿 [illegible] 軍 [illegible] 甚 [illegible] 軽 狂

十月十七日曇

晩起園庭ニ白桔梗ノ新芽ヲ移植

十前十時ヨリ雨ヲ降ス葉ハ根ヲ出ス粒ヲ

拾ク所ノ概略ハ前年ノ通リ

義昌寺ニテ蒔ク為ニ接子ニ脚擡

先鑑ニ枝葉少枝ヲ貰

有ル杆ノ年ノ多汁ヲムレツヲ吸ル

仙宅ニ帰リ湖水漁ヲ呼ビ通常ノ

蒔ク為ニ編集及ビ桜居ヲ五伝鑑張ル

今但蒔治癒ニ物効酒ヲ飲ム

一昨日晴ル　二時頃
又晩晴
十八
夜ヨリ雨天

東京 草稿原製

月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日

五月廿六日

敵艦隊一昨朝二十七日ヨリテ對馬海峡ニ現ハレタルノ我艦隊之ヲ發見シテ後ヲ追ヒ公海ニ出ル方角ニ當リ砲聲ヲ聞クヲ情報達シタルニ就テハ如何ニ第二艦隊ノ主力ヲ挙ケタルモノ如シ我カ如何ニ計畫ノ以テ殊更ニ用心堅固ナル對馬海峡ノ通過ヲ試ミタルモ兎ニ角彼我主力ヲ以テ會戰ヲ見ルニ至リ思フニ敵艦隊ハ其針路ヲ對馬海峡ニ取ラントセバ我艦隊ハ他方ヲ牽制シテ無事ニ通過ノ謀ラントス試ミニ我艦隊ハ恰モ百里眼長風耳ヲ放テ敵艦隊ノ行動如何ヲ一一

多ニ敵如ノ復知シ泰然不動深ノ自ラ期スル所アルモ
知ラズ役レ其主力ヲ挙テ一直線ニ対馬海峡ニ進来
リ我庭池ト称スベキ玄海洋ニ入リタルノ際ハ鴨
池ニ投ジタル同様ニテ勇躍ノ息ノ暇ヲ陷リ殺捕獲我
欲スル所ノモノ敵ニ第二艦隊ノ主力ヲ挙ケ有ト言ヘバ戦闘
艦八隻巡洋艦五隻仮装巡洋艦三隻駆逐艦
八隻其他特務艦ノ合セテ凡ソ二十隻ヨリ我艦隊
ノ勢力ハ固ヨリ明ニ言フノ限ニ非ラズ一ニ対シテ十ノ優勢ノ
古ム曾有ノ大海戦ニテ世界アリテ以来初ノ大治

虞トナレリ

日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月

日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月 日月

三十八年五月廿七日廿八日朝鮮海征戰艦

月日	戰死	重傷	輕傷、微傷
月日 戰艦三笠	八人	二十一人	三十四人 計六十五人
月日 〃 敷島	十三人	七人	十一人 六人
月日 〃 朝日	八人	四人	十三人 七人
月日 〃 富士	八人	十人	十人
月日 巡洋艦春雨	十人	七人	七人 十六人
月日 同 出雲	三人	六人	十七人
月日 同 磐手	〇	二人	十二人
月日 同 浅間	三人	七人	五人

月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日

月日	巡洋艦常磐	一人	。	十四人
月日	同 八雲	三人	一人	七人
月日	日進	七人	九人	十二人
月日	春日	六人	三人	十七人
月日	浪速	一人	。	十六人
月日	千歳	二人	一人	三人
月日	橋立	。	二人	三人
月日	音羽	六人	二人	十八人
月日	松島	。	。	一人

月日	對馬	四人	。	十五人
月日	新高	一人	一人	。
月日	明石	三人	一人	六人
月日	須磨	。	。	三人
月日	秋津洲	。	。	二人
月日	和泉	三人	一人	六人
月日	千早	。	。	一人
月日	朝霧	。	。	四人
月日	千代田	。	。	一人
				二人

月日	曙	。						
月日	雷	一人	。	。				
月日		一人	。	。				
月日	不知火	四人	一人	。	。	。	。	四人
月日	吹雪	。	。	。	。	。	。	。
月日	第一雷	六人	三人	七人	。	。	。	。
月日	第十一隊	。	。	。	。	。	。	。
月日	第十八隊	二人	七人	四人	二人	一人	。	。
月日	第十隊	。	。	。	。	。	。	。

月日	第十七隊	八人	四人					十五人
月日	第十八隊	二人	七人					二人 四人
月日	笠置	一人	三人					五人
月日								
月日	戦死	百十三人						
月日	負傷	四百二十四人						
月日	合計	五百廿七人						
月日	備考	嚴島	鎮遠	第七戦隊				
月日		第十五艇隊	第廿四艇隊	第九艇隊				

第十九艇隊　叢雲　熊野丸
滿洲丸　以上死傷ナシ　霰
朝日新聞ニ投稿　六月二日湯河原
○三十六年四月吉神戸灘艦式ニ出
別紙ニ軍艦中今次波羅的艦隊ノ状況
初瀬　八島　吉野　高千穂
機械故障ニ付沼津ニ投錨
吉野ノ同士衝

六月

一家ノ西洋ヘ拝賀ニ役得位西洋者
ヘ計算ヘ日ノ内ニ高戦 家ノ事業維ヘ
吹投米神戸上陸ん拝賀

一千八百七十萬磅（一億八千二百萬圓）

一米国家船ヘ安分明九ノ五前ヘ出発ス
非れも 馬ニテ 高 此 蒸 ノ 蒸 ノ 蒸 ノ 蒸 ノ

七日 行乙巳五六子ノ法姉式参行

一 露国外務大臣ブリーギン氏アレキシエフ氏ノ辞表ヲ提出

一 九日 アメリカ大統領仲裁ニ入ル 日露新聞発表

一 十日 帝国外務大臣談話

一 アメリカ大統領ルーズベルト

一 米国西亞 アレキセイエフ大公海軍総司令官辞職

一

二月二十三日

新聞 一十三 師団ニ長ハ原口中 吉之藤新平出征暇乞来

是ハ樺太サガレン島ニ向フ

露國側ハ 嬉和全權 六月三十日

一ウイッテ之ノ辭ヲ
一クロパトキンモ面目ナシ

一アレキシフ心根ノ悪ルキ人ナリ
露國モ無人ナリ

一今ノ時、日本ト力ヲ爭ヒ、身代限リト為ルハ誠ニヤリシ、
ヨシ文レ身代ノ把タガルモセヨ東洋艦隊ト波羅ボツク艦隊ノ
全滅セシムレバ露御ヂマン御得意ノ海軍ノ失フ如何トモ
能ハズ東洋ハ光ツ止ム此上ハ艦隊ノ製造シテ英國ノ殆滅
セガレハ世界ノ仲間ニハ外ツレタリ

七月一日報知新聞

一日本ノ拒絶峯盛の特電
六月三十日

日本政府ハ露國タリ正式ノ通牒ヲ接スル迄ハ
日本全權未ダ貞ノ指名ヲ拒ム

七月三日
一露國全權委員
第一回會合
リドウフ
駐米大使ローゼン男

◎外債説に就て

二億若くは三億の新外債が既に成立せしかの如く傳へ、或は目下シンヂケートと交渉中なるやに傳ふるものあり、右に就て日本銀行の某當局者の語る所を聞くに『此等の傳説は事實にあらず、恐らくは高橋副總裁が報告の爲め紐育より一時歸朝すること、なり居りしに、今回再び倫敦へ立歸り用件を處理したる上、歸朝することゝなれるを聞き傳へ、其の用件は外債募集の件なるべしと早合點を爲し、想像説を傳ふるに至りしものなるべし、副總裁渡英の用件は、紐育に於て保管中の外債拂込金（今尚は一億數千圓あり）を漸次倫敦へ送り、倫敦に於ける拂込金（來月に至り全額拂込濟となる）と共に、保管方及び利殖の途を講じ、且は爲替取組みの手順をも一層便利に取り定むる等に在り』と、高橋氏は既に紐育を出發したる由なれば、四五日中に倫敦に着すべしと云ふ

○引揚露艦ノ狀態　相模八月廿四日

第一バヤーン　○第二「ペレスウエット」旅順ヨリ發遣

ポルタワ、ポベータ、レトウイサン、

○バルチック艦隊ノ謀叛　○黑海艦隊ノ謀叛

戰鬪艦クニアーヂ、ポテムキン號

艦内ニ於テ叛亂發生セリ　六月廿七日

セバストポールヨリオデッサニ着港セリ

滿洲軍總司令クロパトキン

滿洲軍總司令クロパトキン辭職

司令官リヂウイッチ　其後任トシテ滿洲軍ノ

米國大統領ルーズベルト、オイスタト灣ニ在リテ

兩國ノ全權委員ト迎接スル筈

佛國大統領ルーベ

新任駐清露國公使ボコトロー、清國大官ハ二十萬

圓ノ土產物ヲ買フ　北公使米國ヨリ歸朝　和使ト講和ヲ

七月廿日 露国二面 媒和 仏ニテウイヨーフ 伯辯

(チシ) 桃三面 山井ッテ 起ッ 平和 黨仕命スレ

平和克復ノ速カナルヲ ト云フ 足ル上云 華盛頓 特約電報

七月 十七日 ウイヨーフ ハンバーノ 廢船 (獨乙港)

月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日

小林猛千代氏ハ明治廿六年七月八日新橋
發鳥山尚彦編別猛千代氏ハ明治二十年二月
橋

日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月